

社会福祉法人尾道さつき会 尾道福祉専門学校  
令和3年度 第2回教育課程編成委員会議事録

1. 日時 令和3年3月11日(金) 15:30~16:30
2. 場所 尾道福祉専門学校 オンライン会議
3. 出席者  
広島国際大学 健康科学部 客員教授 久保田トミ子氏  
社会福祉法人泰清会 サンライズマリン瀬戸 施設長 久保田あけみ氏  
株式会社ゆず 代表取締役 川原奨二氏  
校長 工藤博道 係長 邑岡志保 教務主任 金子清美
4. 議題

①はじめに

1) 2021年度の授業課程に関して

今年度2回目のオンラインでの会議の開催について、新型コロナウイルスによる感染対策を踏まえた上での説明を行う。オンライン授業としても双方向性を確保しながら内容を工夫して授業を行ってきた。オンラインで使用する機器や有線工事等、環境を整えてきた。卒業式では、保護者をZOOMで参加できるようにしている。ただ、実技科目は、実施が難しいところがある。卒業するこの2年生は2年間コロナ禍にある。直接対面する集団活動が少なくなっていることで、今までは変化成長する部分が、どのように違い影響しているところが気になるところである。1年生も制約がある中で、例年との違い、特に人間形成の部分でどうなのか心配している。見立ての校内での実習では再現できないところがある。なによりコロナ禍で、実習を受け入れてくださり感謝である。

2) 学生数等

2022年度は、現在数で新卒者25名、一般生が3名、委託生が10名未確定、休学1名である。

2021年度の入学生は、新卒23名、留年生1名、留学生2名、委託生9名、休学1名であった。

学生数の増加で、さまざまな特徴を持った学生が増えている。個別性を理解した根気のいる指導が必要である。

国試の結果については、4年連続100%ではあったが、今年度は数名自己採点では合格点に達していない。現在の補習者が終了すると全員の卒業が決定する。

留学生については、ベトナム人2名が在籍する。ベトナムでN2取得者であるが、話すことが難しい状況が現在もある。次年度は、留学生はいない。

② 2022年度カリキュラム等

コロナ禍だった2021年度後期授業の実施経過については、2021年度後期授業の約2割弱がオンライン授業となったが、11月、12月を中心に対面授業を実施した。オンライン授業でも、グループでの話し合いなどの活動を取り入れ、遠隔地からパナソニックの方にオンラインでICT介護ロボットの活用の講義や、また、大阪在住の80代の介護福祉士の活躍についての講義などZOOMを使って県外で活躍しておられる方と接することができた。

1年生の実技系の生活支援技術Ⅲの科目は、2グループに分けて授業をしているが、9コマ分を今

週と来週で実施している。これが今年度分授業の最後となる。来年度は、感染状況が良いようであれば実技系の科目の授業を優先して行うことを考えていけるとよいかと思う。

2022年度の行事予定から新年度もコロナ禍を前提にして、介護実習前のPCR検査と、実習期間後に数日間予備日を設けている。ゴールデンウィーク後、介護実習前等はあわてることなく、オンライン授業を予定して感染リスクを最小限におさえるようにする予定である。先週、感染対策に気を付けながら、福山市のレクリエーション協会の方々にご協力いただき笑いヨガやボッチャなど福祉レクリエーションの活動を授業で行った。現場での活用方法の参考になり、貴重な学生同士の交流の機会になった。

2022年度授業課程進行表から、法人から介護福祉士の職員が1名、時短勤務で教員として加わる。専任教員担当の科目は、複数で協力し合って担当する。

### ③ 実務者研修の実施状況

2021年度実務者研修は、20名の受講生で、このうち住所地では尾道市の方が13名で多く、事業所では特養5名、デイサービス5名である。2022年度の実務者研修は現在申込受付中で、現在10名が申し込まれているところである。

### ④ 意見交換、その他

川原先生：新年度のオンライン授業の実施の確認ののち、進級者のレベルについて、ある程度のレベルに達しないと進級をしないというのではなく、2年間で評価することはできないのか。法人として入学を許可するのなら責任をもって進級できる方向にもっていくべきではないか。そうでなければ、入学時に入学許可を出すことを避けたほうが良いのではないか。1年だけで退学になってしまっはその後の人生が心配である。

校長：進級会議において、慎重に一人ひとりの状況を確認し話し合い、その学生にとって最も良いと思われる判断はしている。1名は、あまりにも点数が足りずに不認定科目が多すぎて、進級できない状況である。自分から退学を申し出た学生である。また別の1名は、休学して、社会資源の調整をして、自分自身を見つめることとしている。その学生にとって良い進路を見つけていく。

邑岡先生：休学を決めた本人も、本人以上に家族が、本人の生活のしづらさに不安を抱えていたため、専門職につなぎ、近く、担任と専門職を同伴で家庭訪問の予定である。辛く不安な状況そのままにしない取り組みをしていく。

校長：今までには、留年して3年で卒業して介護福祉士として働いている学生もいる。入試での判断も必要になってくる場合はあると思われる。

久保田あけみ先生：専門学校からの卒業生の就職は少ない状況で、技能実習生の受け入れの予定がある。世界状況で、費用面での高騰がある。また、高齢の職員が多くなると、介護現場での労災状況も起こりやすくなるという現状がある。

久保田トミ子先生：発達障害のある学生等の受け入れは、その人たちの人生において、成功体験をサポートする必要がある。退学者を出さない対応をしてきた。留年しながら、その後に伸びる時期があ

らと思っている。福祉の中で活躍ができるように、学生の特徴をつかみながら支援していく。伸びる教育をあきらめず伸びることを信じる。N3 の学生がいたが、高齢者とのコミュニケーションで力を付けた学生もいる。活用できるプログラムを用意することが大事である。

邑岡先生：コロナ禍でできることを工夫していくことを継続していく。人をそだてることと、経営との両立をしていくことも必要であると考えている。今後のご意見をお伺いする。

校長：5年前の就任時には、1 学年 15 人程度であり、経営が困難な中であつた。法人が手放さず学生数が増加傾向にある。県東部において恩返しができる。教育は、少しずつでもプラスになるほうこうで導いていくことが必要であると思う。